

本日も、熊本労災病院のHPを訪れていただきありがとうございます。

今年も残すところ、あとわずかとなりました。八代でも北風が吹き、いちばん昼が短い季節です。

COVID-19が、またもや猛威をふるっています。県の警戒レベルも最高になり、8月以来のことで、面会禁止や職員の行動制限はマックスになっています。1-2週に1回開かれる、熊本県の関係病院や行政の会議でも、特に熊本市内などの病院の切迫状況が伝わってきます。この季節、人と会えないのは極めて希有でつらいことですが、今年是我慢の年にせざるを得ないようです。

12月に入り、例年通り患者さんの数は増加傾向になりました。しかし、地元でもこのウイルス感染の広がりを受け、これから再度減少に向かうかもしれませんし、当院の陽性患者さんの入院状況によってはいろいろな診療機能を犠牲にして陽性患者受け入れのための病床を準備する必要があるかもしれません。いわゆる医療崩壊は、陽性患者さんの診療ができないだけでなく、通常診療の能力余力が削がれることを含みます。そうならないように、機動的に病床の準備をしていきたいと思えます。

先日の新聞記事では、今年の乳がんの患者さんの減少が懸念されていました。当院も、林乳腺外科部長のもと、積極的に乳がん患者さんの診療にあたっておりますが、やはり昨年より減少しているようです。その分、例えば来年に進行症例が増えたりしないか心配しています。病院での感染リスクは確かに懸念材料でしょうが、癌診療に遅れが出る方がもっと怖いことです。気になる点があるかたは積極的に受診されることをお勧めします。これは、乳がんだけではなく、院内へのウイルス持ち込みには最大の注意を払っています。どうぞ安心して本来の医療を受けに来て下さい。

お産も全国的に減少しているとの学会報告があります。当院でも、春先の里帰り出産の減少もあり、今年分娩数が減少しています。当院は、周産期医療機関として、たとえ陽性の妊婦さんが来られても万全の体制を取ります。すでに世界的にも陽性患者さんからの分娩や帝王切開は行われていますし、それ自体が極めて危険というような症例はありません。病院でちゃんと診てくれないかも知れない、というような不安から妊娠を避けることはやむを得ないことかもしれませんが、医師として、このCOVID-19の感染蔓延の中であえて妊娠出産を避ける必然性は感じません。安心して妊婦さんがお産を委ねられる病院として今後も努力いたします。

先日、正面玄関前の花壇に、八代中高校の生徒さんがパンジーなどの花を植栽してくださいました。八代南ロータリークラブの生徒組織として作られた、「八代インターアクトクラブ」の活動の一環です。寒い中、楽しそうにデザインを相談しながら、時間をかけて植えてくれました。彼らの若々しさ、力強さには、羨望しかありません。私も、その昔、その年齢のころ、北海道の冷害支援として、学校の友達とリヤカーを引いて廃品回収をして寄付をした記憶があります。いくら集めたのかの記憶はありませんが、子供心にも何か社会に役に立った、という満足感を憶えています。病院として大いに助かっているのですが、彼らにもなにがしかの思い出が残っていたらうれしいなと思います。今はイルミネーションや院内のクリスマスツリーとともに和まされるアイテムになっています。機会があればご覧ください。

本当に、あっという間の、じっとしていたら終わりになる、というような年でした。来年こそいい年に、と、神社仏閣や教会でなく、今年は心の中で祈りながら年越しをしたいと思えます。来年もどうぞよろしく願いいたします。